

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2019年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	観光学	研究科	観光学	専攻		
<b>研究代表者</b> (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名				
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 3年 (学生番号: 17WA001C )		鍋倉 咲希		印		
<b>指導教員</b>	所属部局・職		氏名				
	観光学部・教授		高岡 文章		印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	観光化するコミュニティ ——ゲストハウスにおける観光者の交流をめぐる社会学的研究						
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名				
	観光学研究科観光学専攻 博士課程後期課程3年次		鍋倉 咲希				
<b>研究期間</b>	2019 年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は簡易宿所であるゲストハウスを事例に、人、もの、情報のモビリティが高まる現代社会において、観光がいかなるコミュニティを生み出すのかについて社会的に明らかにすることを目的としている。ゲストハウスでは観光者同士の交流が積極的に行われる。そこでの交流の特徴として、観光先であるために日常生活とは異質な人間関係が築けることや関係が非-継続的であることなどが明らかになった。加えて人びとはそうしたゲストハウス特有の交流を知り、目的化している。観光の移動による出会いや交流自体は新たな現象ではない。しかし現代において、人びとは移動による「一時的な関係」に意味を見出し、意識的に求めている。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ コミュニティ } { 移動 } { ゲストハウス }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

### 1. 研究の背景と目的

本研究の目的は人、もの、情報の「モビリティ」(Urry 2007=2015)が高まる現代社会において、観光がいかなるコミュニティや社会関係を生みだしているかを社会的に明らかにすることである。とくに、本報告書では 2019 年度の立教 SFR 大学院学生研究の研究費を用いて行った国内調査の成果をまとめる。

社会学においては、近代化以降に生じた人びとのつながり方の変容について種々の議論が蓄積されてきた。とりわけ、つながりの契機が「義務」から「選択」へと変化している点が指摘されている。伝統的社会において、人びとの連帯の中心は地域共同体や親族関係のなかに置かれてきた(地縁・血縁)。それに対し、企業や学校など近代的組織が発達してくると、人びとのつながりは部分的かつ選択的なものになってくる(社縁)。加えて、1980 年代以降には、つながりのかたちがさらなる多様化をみせ、メディアを介した結びつきや趣味・ライフスタイル・価値観によるつながり、居場所、ボランティア・アソシエーションなど、新たなつながりが可能になってきている。

そのなかで、つながりの変化を促した要素のひとつにモビリティがある。人、もの、情報の移動が増大する現代においては、移動により自己アイデンティティや社会関係、コミュニティの再編が生じているという(Elliott and Urry 2010=2016)。こうした状況を捉えるにあたり、人文社会科学における「移動論的転回」を主張した J. アーリは観光現象に注目する。いまや観光は狭義の意味での余暇の形態としてではなく、観光的な物事の見方や消費の形態として、人びとの日常生活に入りこみ、新しい出会いやコミュニケーションを生みだしている。

しかし、観光という移動によって作りだされる社会関係の分析は、これまで観光地である地域社会内部のコミュニティに関する研究か、観光者と観光地社会との関係に関する研究にとどまり、移動者同士が形成する社会関係についての分析は等閑視されてきた。したがって本研究では、観光者が作りだす社会関係に注目し、観光がいかなるコミュニティや社会関係のかたちを生みだしているかを明らかにすることを目的とした。事例は近年国際的に増加を遂げているゲストハウスである。ゲストハウスは宿泊者同士の交流が積極的にみられることから、観光者同士の交流が観察しやすい。本研究ではゲストハウスで成立するつながりの種類や特徴、その意味について分析を行った。

### 2. 研究の方法

社会学の視点から文献調査と現地調査を行った。文献調査は社会学および観光研究におけるコミュニティやコミュニケーション、つながりに関する研究を整理した。現地調査は 2019 年 8 月 16 日～9 月 9 日のあいだ、岡山県倉敷市、山口県萩市、山口県下関市、福岡県北九州市にそれぞれ位置しているゲストハウス(一都市一軒ずつ)にて行った。

具体的に現地調査では、各ゲストハウスで参与観察と聞き取りを行った。参与観察ではほかの宿泊者やゲストハウスのスタッフとの観光や食事に同行し、交流の様子を観察した。また、宿泊者やスタッフとの行動中にはゲストハウスに滞在している理由や滞在前後のイメージの差、ゲストハウスにおける交流の様子などについて質問を行った。さらに、ゲストハウスが地域社会に対しどのようにかかわりをもっているのかについても調査した。

加えて、2018～2019 年度には東南アジア(カンボジア、タイ、ベトナム、ラオス)における日本人ゲストハウスの調査にも取り組み、国内現地調査の成果との比較を行っている。

### 3. ゲストハウスにおける交流

#### 3.1 ゲストハウスの概要

日本国内におけるゲストハウスは旅館業法上の簡易宿所営業(宿泊する場所を多数人で共用する構造及び設備を設けてする営業)に分類されるが、明確な定義が難しい施設である。国内のゲストハウスに対するアンケート調査を行った石川・山村は、ゲストハウスを「ゲストハウスやバックパッカーズ、ホステル、ドミトリー等と称する素泊まりを基本とした比較的低廉な宿泊施設」と広く定義している(石川・山村 2014)。そのため、ここでは施設の機能的特徴からゲストハウスを理解しておきたい。ゲストハウスの中心的な要素は(1)交流スペースが存在すること、(2)1泊素泊まり1人から安価な宿泊が可能であること(2,500円～5,000円程度)、(3)ドミトリーが存在すること、(4)トイレやシャワーなど水回りが共有であることなどである。

国内のゲストハウスは近年急増している。ゲストハウス紹介サイト Foot Prints によれば、軒数は 2011 年ごろから増え始め、2019 年 2 月には 2011 年の 4 倍近い 1,200 軒にのぼっているという(Foot Prints 2019)。背景には訪日観光客の増加による宿泊需要の高まりや地方や都市で増加する空き家物件の活用需要などがある。ただ、小規模な自営業であることや宿泊費の安価さなどの特徴から、経営上の困難も多く継続が難しいことも指摘できる。

#### 3.2 交流の種類

ゲストハウスでは観光者同士の積極的な交流がみられる。倉敷市にあるゲストハウスのコンセプトに「初対面なのに、いつの間にか打ち解けてしまう。/昨日まで知らなかった人に、いろんな話をしてしまう。/ここは、二度と訪れない出会いが生まれては、つながってゆく場所」とあるように、ゲストハウスでは毎日入れ替わっていく宿泊者たちのあいだで新たな人間関係が日々形成される。以下ではゲストハウスにおける交流の種類やその特徴を明らかにする。ゲストハウスでみられるつながりの種類として、①ドミトリーにおける出会い、②交流スペースでの会話や飲食、③観光への同行、④食事への同行の 4 つがあげられる。まず、ゲストハウスの特徴である①ドミトリーでは、通常

## 研究成果の概要 つづき

1 床分の就寝スペースと鍵付きのロッカーが 1 人分のスペースとなる。ドミトリーではシャワーやトイレを共有することもあり、同室の宿泊者と衣住をともにすることで、必然的にさまざまな会話を交わす。これは個室に泊まるコミュニケーションとは異なった関係の形成である。

つぎに、ゲストハウス最大の特徴である②交流スペースでの会話や飲食をあげよう。一般に交流スペースには多くの人が座ることのできるスペースがあり、ガイドブックや本、漫画などが置かれている。また、いくつかのゲストハウスはカフェやレストランを兼ねており、宿泊者や外部からの来訪者は簡単な飲食、飲酒を楽しむことができる。ゲストハウスの利用者は 1 人旅であることが多く、人びとは話し相手を見つけるために交流スペースに集まる。交流スペースでは観光や旅程の情報交換が行われたり、より仲が深まれば仕事や恋愛の話、日常生活の話が行われたりする。話が盛り上がると、深夜まで飲み会が続くことも少なくない。そして、多くの宿泊者はこうした交流が行われることを知ったうえで、好んでゲストハウスに宿泊している。

③④観光や食事への同行もまた、ゲストハウスの魅力のひとつとして数える人が多い。交流スペースやドミトリーでほかの宿泊者と知り合ったとき、観光の旅程が一緒であったり誰かの予定に興味を持ったりした場合、一緒に出掛けることがある。重要なのは出かける際に相手とコミュニケーションをとった時間や両者間の親密度についてはあまり考慮されないことだ。交流スペースでのコミュニケーションと同様に、利用者はあらかじめ「ゲストハウスはこういうもの」という理解をしており、通常とは異なる速度で形成される社会関係にたじろぐことはない。

### 4. 規則性と流動性の併存——ゲストハウス特有の「コミュニティ」

こうしたゲストハウス特有のコミュニケーションに対し、宿泊者はいかに考えているか。前述したように、人びとは明らかにゲストハウスの規則を承知して宿泊している。現地調査では、同じゲストハウスを 27 回来訪している 60 代男性が、複数人で夕食に行き、その後周辺を散歩している最中に「ゲストハウスのこういう雰囲気が好き」と述べた。また、ある宿泊者は、ほかの宿で年配の宿泊者が若い宿泊者に「こんな早くから『悪いあそび』覚えちゃって」と言ったことが印象的だったと述べた。「こういう雰囲気」や「悪いあそび」はゲストハウス特有の交流を想定している。ここから、ゲストハウスの交流の特徴のひとつは①～④にみられるような「ゲストハウス特有のノリ」を多くの人が予期しそれを求めていることだ。また、ここでは詳述しないが、ゲストハウスに初めて泊まる宿泊者は①～④を経験しゲストハウス特有のノリ＝規則を覚えていく。ゲストハウスにはその場のコミュニケーションを規定するメタな規則が存在し、それは後述するようにゲストハウス特有の交流の魅力につながっている。

規則の存在に加え、ゲストハウスの交流の特徴としてもう 2 点とりあげたい。ここで重要なのはゲストハウスの宿泊に際し身体的な移動をもたらす効果である。移動者たちの交点としてのゲストハウスの特性に注目しよう。

観光人類学が儀礼研究を参照し観光の作用を説明したように、観光という行為は移動をとまなうことで、日常から社会的・空間的な離脱をし、価値や慣習が転倒する非日常を経験してまた日常への再統合を果たす。つまりゲストハウスに宿泊することは、第一に日常生活とは離れた出会いや社会関係の生成をもたらす。実際、ゲストハウスの宿泊者は出身地や職業、経歴、年齢がさまざまであり、人間関係が固定的になる日常生活では出会いにくい人びとと交流することができる。調査でもこうした条件を人びとが楽しんでいる様子がうかがえた。他方で、ゲストハウスの宿泊は「帰宅」による日常生活への再統合を含んでいることから、そこでの関係は一時的になりうる。ここから第二に、ゲストハウスで形成される社会関係は継続／切断の選択可能性をもつことが指摘できる。

身体的な移動による出会いは、日常を離れて新たな社会関係を生成する機会を人びとに与え、他方で関係を切る／つなげる「チャンス」も与えてくれる。①～④の交流形態やそれを人びとに承知させるメタな規則は、一時性という限定性と組み合わせ、ゲストハウス特有のコミュニケーションに人びとを駆り出すのである。

したがって、現代において観光がいかなるコミュニティや社会関係のかたちを生みだすのかという問いへの 1 つの答えは、身体的な移動をとまなう観光先だからこそ成立する、観光者同士の、非日常の、非継続的な社会関係であるといえよう。ゲストハウスの事例は、観光による新たな他者との出会いの可能性、そして関係の断絶可能性（もちろん継続の可能性も）を求める現代観光者の姿を浮き彫りにしている。ゲストハウスでみられるのは、人びとの移動によりメンバーが入れ替わるという意味では非固定的だが、一方で規則的な交流が「常に」行われるという意味では固定的な「コミュニティ」なのである。

参考文献 Elliott, A. & J. Urry, 2010, *Mobile Lives*, Oxon: Routledge. (=2016、遠藤英樹監訳、『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房。) /Foot Prints, 2019, 『日本のゲストハウス誕生の経緯』、URL2019年9月22日取得。/石川美澄・山村高淑, 2014, 『国内における宿泊施設型ゲストハウスの経営と利用の実態に関する研究』『都市計画論文集』49(2):140-145。/Urry, J., 2007, *Mobilities*, Cambridge: Polity. (=2015、吉原直樹・伊藤嘉高訳、『モビリティーズ——移動の社会学』作品社。)

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)**

- (1) 鍋倉咲希、関東社会学会第67回大会、「『旅』における共同性の形成——東南アジアの日本人ゲストハウスにみられる交流を事例に」、2019年6月9日、東京：早稲田大学戸山キャンパス。
- (2) 鍋倉咲希、観光学術学会第8回大会、「『観光的つながり』に関する社会学的研究——東南アジアの日本人ゲストハウスにおける交流を事例に」、2019年7月7日、大分：立命館アジア太平洋大学。
- (3) 観光学術学会第8回大会、大学院生発表奨励賞優秀賞受賞、2020年2月。